

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01095

研究課題名（和文）平安時代の物資流通に関する多角的基礎研究 須恵器・施釉陶器・中国陶磁を中心に

研究課題名（英文）Multidimensional Basic Research About Circulation of Goods and Products in the Heian Period

研究代表者

高橋 照彦（Takahashi, Teruhiko）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：10249906

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本の古代から中世への変容過程の解明を目指し、平安時代の考古学の側面から検討を加えた。研究対象として、日本産の須恵器や施釉陶器、中国産の陶磁器といった焼物類を主に取り上げ、それらの流通状況を解明することに重点目標を置き、基礎的な研究を深めた。出土資料の集成作業と、新たな年代観や産地同定法に基づいた検討の結果、上掲の焼物類の流通の実相について新たな知見を得ることができた。とりわけ、平安期の須恵器として著名な丹波の篠窯で生産された鉢については、10世紀末から11世紀初め頃の資料が最も多く出土することを確認でき、当該期が中世の流通の展開に先駆けた様相を示すことを指摘できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世以降に物資流通が大幅に拡大して、商業的展開への大きな転換点であることが指摘されているが、陶磁器類の場合の画期として11世紀後半での製品内容の変質や12世紀以降での大幅な流通量の増加が指摘されていた。ところが、篠窯産鉢などの検討から既に10世紀末から11世紀頃の撰関期に萌芽的な展開を示す点を解明できたことが学術的意義の1つといえる。ただ、撰関期そのままの形で継続せず、変質して中世に至る側面も重要であり、歴史的展開の実態がより明確となった。

研究成果の概要（英文）： This study aimed to elucidate the process of transformation from ancient to medieval Japan from the aspect of archaeology. The research focuses on Japanese Sue ware, Japanese glazed pottery and Chinese ceramics, with an emphasis on the distribution of these goods. Based on the compilation of excavated materials and new methods of chronology and provenance identification, I gained new knowledge about the realities of distribution. In particular, the largest number of bowls produced at the Shino kilns in Tamba region were found to date from the end of the 10th to the beginning of the 11th century, indicating that this period was a precursor to medieval commerce.

研究分野：考古学

キーワード：流通・消費 須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器 中国陶磁 篠窯跡群

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 古代から中世への移行過程 日本史研究において古代から中世への移行過程の解明は大きな論点の一つである。その焦点ともなる平安時代は、中国を範とする古代国家体制からの離脱と民族文化の形成など、日本の基層文化を考える上でも無視できない。ただ、文献史学では種々の議論が展開するが、時代の特質や画期の評価に揺らぎが大きい。

(2) 平安期考古学研究の必要性 上記の研究現況に対して考古学は通時代的な比較が可能であり、価値を有する。ただ、現状の考古学において古墳時代から飛鳥時代はかなり関心も高いものの、平安時代については研究が敬遠されがちである。その克服が本研究の目指す根本にある。

(3) 日本列島史としての検証 長期的視野からみて大きな転換であるかを問い直すためにも、基礎的な議論が必要である。それに向けて考古学から期待できるのは、とりわけ物資の生産・流通などの基層的な変質過程の側面と考え、その点に重点を置いた研究に取り組むことにした。

2. 研究の目的

(1) 物資流通からみた移行過程の解明 中世史や中世考古学では物資流通に関する蓄積が多く、近世以降の流通の発展についても視野が開けているが、古代は政治性が重視されがちで、必ずしも中世以降に対応する要素が意識的に追究されていない。そのため、近年の考古資料の再検討により、古代後半期から中世への移行過程の実態を整理していくことを大きな目的とする。

(2) 考古資料の多面的な要素の検討 物資流通の検討対象として、残存度による偏りが少ない土器・陶磁器、とりわけ須恵器・施釉陶器・中国陶磁を主に取り上げる。とりわけ平安期の有数の須恵器産地として知られている丹波の篠窯の製品について流通の実態を解明するとともに、複数の器質を視野に入れて比較検討を試みたうえで、その特質を見出す。

3. 研究の方法

(1) 新たな年代や産地の基準に基づく分析 流通などを考える上での基礎として、生産地やその周辺の消費地資料について編年や産地的特質について再検討を試みた。そのような新知見を消費地遺跡出土品に適用して、より細かな時期変化による生産量や供給域の変化などを辿ることとした。

(2) 広域の集成と狭域の細密な分析 土器・陶器類の資料集成作業による広域分析を行う一方で、報告書などでの判別には限界を伴うために、重点地域における実見を含めた狭域での実見調査を行うことにした。そのうえで、須恵器、国産施釉陶器や輸入陶磁器類などの焼物を統合的に論じることを目指した。

4. 研究成果

(1) 生産地の様相の基礎的解明

当初は製品流通の検討に力点を置く予定であったが、コロナの感染拡大もあって調査が制限されたことに加え、生産地の様相の解明もさらに必要である点も判明したため、まずは生産関連での基礎的な再検討を加えることにした。その結果として、平安京近郊のうち丹波の篠窯において新たな採集資料の成果を受けて近江産と酷似した緑釉陶器を生産している様相を明確にした。それにより本研究代表者が調査していた西山1号窯の資料の前段階に、より直接的に近江から技術を受容していることが解明され、産地差などの問題を問い直した。また、東海地域や近江地域では、緑釉陶器や灰釉陶器編年などの基礎になる分類を再検証した。さらに、防長地域では周防鑄銭司周辺での生産時期を推測し、その生産内容を見定めることで、長門や周防国府での生産内容との差異など抽出することができた。ほかに平安京周辺窯のうち洛北や洛西の窯資料についても再検討を試みて、編年などの基準を再検討した。

(2) 篠産須恵器の流通状況

平安時代を代表する篠窯で生産された須恵器に関して、とりわけ重点的な検討を試みた。本研究代表者などによる生産地資料の研究により、鉢における口縁部の成形技法や仕上げの調整手法、高台部の形状など、いくつかの要素での時期的な変化が判別できることを新たに明らかにしており、その新たな編年案を提示してきたので、それに基づいて篠産須恵器の分布について新たに資料集成を行い、一部については実見調査を試みた。その結果、まずこれまで知られているよりも北端・南端についてより広がっていることが判明し、広域の流通が再確認された。その一方で、各地への流通状況としては九州では大宰府関連遺跡、四国では伊予国府推定地周辺、東北地域では多賀城跡などでの集中がより明確化した。

また、篠産須恵器の流通状況について、時期的な変遷をみていくと流通域内のほとんどの地

域において、10世紀末から11世紀頃の西山1号窯段階の資料が最も多く出土する状況を確認できた。この西山1号窯段階は、これまで十分に識別されてこなかった篠窯でも末期の須恵器生産段階で、筆者らの研究によって区分された時期に相当する。近畿地域をはじめ、先に挙げた通り全般的に出土が多い大宰府や多賀城、伊予国府周辺域などでは、西山1号窯段階においてその前段階までと比べて出土数が大幅に増加している。篠窯の最終操業期であることからむしろ衰退期ともみなされがちであったが、むしろ逆に流通量が増加していることから、中世的な広域供給への萌芽がみられるものと判断した。

(3) 各種製品の流通状況と史的検討

篠産須恵器が国府関連遺跡などに集中する傾向がある点は、東日本に広く流通する灰釉陶器や九州での出土が卓越する中国陶磁とは異なり、緑釉陶器などと似た出土傾向であることが読み取れた。ただし、細かく狭域の分析で確認すれば、例えば多賀城において緑釉陶器が集中する地区と篠産須恵器の出土地とは必ずしも一致するわけではなく、用途面での差異もあろうが、必ずしもセットとして各地にもたらされているわけでもないことも明らかになった。篠産須恵器が緑釉陶器のような奢侈品よりも日常什器的な存在として広域流通していたことがうかがわれ、中世に向けての流通を考える上でも改めて注目すべきである。

また、篠産須恵器については、時期が下るにつれて、それまで供給のみられなかった地域などにも広がっていくことになり、この点は緑釉陶器や灰釉陶器が比較的限られた分布であるものが国府周辺以外の地域、例えば東北では城柵以外の遺跡にも広がっていくことと同様の傾向と評価できる。広域的な流通への変質は、古代的な政治拠点への中央的な器物の流通から、より商業的な製品への性格を帯びていくことを示し、この点でも中世的な方向性での変化を見出すことができた。

さらに、篠産須恵器でも鉢という特定器種の流通の拡大期は、藤原道長などの全盛期ともいえる、いわゆる摂関期になり、中世への大きな変動期として再評価が必要であることが指摘できた。この点は中国陶磁に関しても、11世紀前半頃において越窯系青磁が博多で集中出土する事例もあるように、流通全般における新たな萌芽とみるべきであろう。

ただその一方で、その流通量は11世紀後半や12世紀以降と比較してはるかに少ない点も指摘でき、また篠産須恵器、国産施釉陶器や越窯系青磁の生産・流通が11世紀前半には衰退していくことにも象徴されるように、中世段階の流通とは製品の内容も様相も大きな変化を示すことから、10世紀末から11世紀前半には中世に向けた前兆的な動きにとどまる点も確認できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋 照彦	4. 巻 8
2. 論文標題 尾張・美濃の平安期施釉陶器生産をめぐる2、3の問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府埋蔵文化財論集	6. 最初と最後の頁 317-326
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 照彦	4. 巻 761
2. 論文標題 平安時代における施釉陶器・須恵器の生産と流通 篠窯を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 35-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋 照彦	4. 巻 130-12
2. 論文標題 書評 古尾谷知浩著『日本古代の手工業生産と建築生産』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋照彦	4. 巻 54
2. 論文標題 近江における緑釉陶器生産の再検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 待兼山論叢	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋照彦	4. 巻
2. 論文標題 史跡周防鑄銭司跡隣接地出土の緑釉陶器 - 東禅寺・黒山遺跡を対象に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代テクノポリス山口研究報告書	6. 最初と最後の頁 121-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋照彦	4. 巻 2020 - 12
2. 論文標題 吉田恵二著『日本古代の窯業と社会』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 96-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋照彦	4. 巻
2. 論文標題 洛北・本山官山遺跡の基礎的検討 石作窯成立前夜の様相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 安期緑釉陶器・緑釉瓦生産の多分野協働型研究	6. 最初と最後の頁 95-112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋照彦	4. 巻
2. 論文標題 日本古代の窯業生産 土器・陶磁器と瓦磚から探る歴史像	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 摂関期の瓦陶兼業窯をめぐる多面的研究 丹波・篠窯跡群を主な対象に	6. 最初と最後の頁 391-414
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 高橋 照彦
2. 発表標題 日本における奈良・平安期の施釉陶器生産
3. 学会等名 国際学術シンポジウム「東アジア都市文明の考古学研究」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋 照彦
2. 発表標題 古代日本における須恵器と施釉陶器の生産と流通 丹波篠窯跡群西山1号窯の調査とその成果を中心に
3. 学会等名 京都大学考古学談話会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋 照彦
2. 発表標題 古代の編年研究と実年代をめぐる諸問題
3. 学会等名 東国古代遺跡研究会第11回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋 照彦
2. 発表標題 日本古代における国産施釉陶器と舶載陶磁器
3. 学会等名 第48回古代城柵官衙遺跡検討会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋照彦
2. 発表標題 平安京周辺における緑釉陶器生産 石作窯の特質をめぐって
3. 学会等名 シンポジウム「京の翠とわざの粹 - 緑釉陶器と緑釉瓦」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋照彦
2. 発表標題 日本古代銭貨をめぐる諸問題 研究の現状と課題
3. 学会等名 山口大学考古学研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 盧柔君
2. 発表標題 千峰翠色買將來 - 中國唐宋時期越窯系青瓷の生産與消費
3. 学会等名 國立清華大學人類學研究所研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 盧柔君
2. 発表標題 跨國陶瓷貿易中的選擇：從日本的唐宋期越窯系青瓷消費談起
3. 学会等名 國立臺灣大學人類學系研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 大西遼・井上喜久男・高橋照彦・田畑潤	4. 発行年 2022年
2. 出版社 愛知県陶磁美術館	5. 総ページ数 143
3. 書名 平安のやきもの その姿、うつろいゆく	

1. 著者名 菱田哲郎・吉川真司・高橋照彦ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 512
3. 書名 古代寺院史の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中久保 辰夫 (Nakakubo Tatsuo)		
研究協力者	上田 直弥 (Ueda Naoya)		
研究協力者	盧 柔君 (Lu Roujun)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	白石 純 (Shiraishi Jun)		
研究協力者	田中 由理 (Tanaka Yuri)		
研究協力者	齋藤 努 (Saito Tsutomu)		
研究協力者	中川 あや (Nakagawa Aya)		
研究協力者	津野 仁 (Tsuno Jin)		
研究協力者	東村 純子 (Higashimura Junko)		
研究協力者	市 大樹 (Ichi Hiroki)		
研究協力者	吉野 秋二 (Yoshino Syuji)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	竹内 亮 (Takeuchi Ryo)		
研究協力者	唐 麗薇 (Tang Liwei)		
研究協力者	岩崎 郁実 (Iwasaki Ikumi)		
研究協力者	上村 緑 (Uemura Midori)		
研究協力者	小平 梨紗 (Kohira Risa)		
研究協力者	山口 等悟 (Yamaguchi Togo)		
研究協力者	蓮井 寛子 (Hasui Hiroko)		
研究協力者	我妻 佑哉 (Wagatsuma Yuya)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------